

新「清沢満之全集」完結に寄せて

## 思索者としての清沢満之

池上哲司(教授・倫理学)

『清沢満之全集』全九巻のうち、第一巻から第五巻までの副題に「哲学」の文字が含まれているということからも、満之における哲学の重要性は明らかである。ただ、満之が1903(明治36)年満四十歳という若さで亡くなったことによって、それ以後に書かれ、当然『全集』に収められたであろう哲学関係以外の文章が書かれずに終わったということも忘れてはならない。もし満之があと十年生きていたとしたら、なにを考え、どのような文章を書いていたであろうか。

雑誌『精神界』所収論文を中心とした第六巻、あるいは第七巻の雑誌『教界時言』所収論文を読めば、満之晩年の関心事はある程度分かる。しかし、生きていたとしたら四十歳以降の満之がどのような思索の道を歩んだかとなると推測にとどまらざるをえない。となると、問題はその推測の精度をどこまで高めることができるかである。思索の歩みを予想するためには、その思索のこれまでの歩み方もいふべきものを知る必要がある。そして、現在のわれわれには若き日の満之の思索訓練とその歩みが、彼の哲学研究として与えられているのである。

満之の思索が辿った道を概括的に見てみよう。哲学関係論文のうち彼自身によって題をつけられたものを以下に挙げる。明治21年『哲学館講義録』所載の「心理学」「純正哲学」、明治21年から22年にかけて『教学誌』に発表された「宗教哲学講義」、明治25年の『宗教哲学骸骨』、明治26年の“The skeleton of a philosophy of religion”、明治28年に執筆された「他力門哲学骸骨試稿」。ここからも、純正哲学から宗教哲学そして他力門哲学へと向

かう満之の歩みを見て取ることができる。

もう少し細かく見ていこう。満之の思索の歩みをより具体的に知るには、彼が他の哲学者の思索をどのように把握理解したかを見るのが一番である。第四巻に収められた大学時代の英文レポートを含む「哲学研究ノート」は満之の哲学修業時代を明らかにするものである。また「西洋哲学史試稿」は、後に明治22年から27年まで哲学史として講ぜられた第五巻の「西洋哲学史講義」として発展させられた。そこで満之は、プラトン、アリストテレス、デカルト、スピノザ、ライプニッツ、カント、ヘーゲルといった哲学史上の巨人たちの思索の論理性を徹底的に問い抜くのである。とりわけヘーゲルとの対決は、宗教を無限と有限との関係から見ていこうとする満之



『宗教哲学骸骨』(表紙)

の発想に強い影響を与えたと思われる。

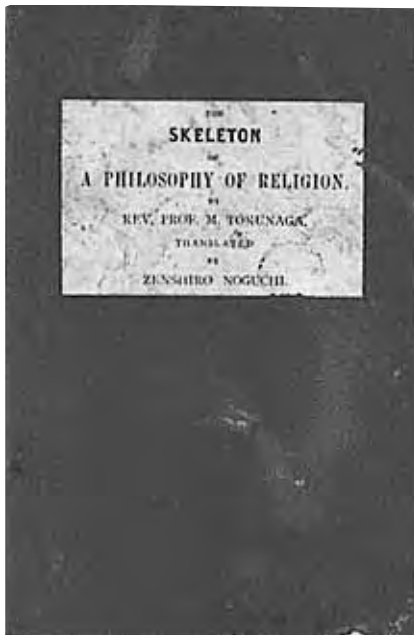
西洋思想を日本に移し入れようとするとき、必ず問題になるのが翻訳ということである。外国語を日本語に置き換える場合、一対一に対応するはずもなく、どうしても意味の広がりやずれてしまう。したがって、できるだけ意味のずれが生じないような言葉を探すことが、外国の思想に初めて出会った人々の避けることのできない課題となる。まさに、清沢満之もその世代に属していた。論理学、心理学関係の論文を含む第三巻および第四巻、第五巻を丹念に読み解くことで、満之の悪戦苦闘と思索の形成を知ることができるはずである。

そのような過程を経て満之は宗教哲学に向かう。宗教をどのように定義するか、これが哲学者清沢満之の課題であった。第一巻に収められた諸論文を読み進んでいくと、「宗教哲学講義」と明治24年の「宗教哲学」との間に第一の転換が認められる。さらに、「宗教哲学」「宗教哲学骸骨初稿』『宗教哲学骸骨』と、「宗教哲学骸骨講義」「*The skeleton of a*

*philosophy of religion*”との間に第二の転換が認められる。

第一の転換において、宗教を無限と有限との関係から捉えていこうという発想が明確になる。先に述べたように、この転換には満之の西洋哲学史研究が影響を及ぼしていると思われる。第二の転換は、『宗教哲学骸骨』を“*The skeleton of a philosophy of religion*”へと英訳する過程の思索によってもたらされたと言えよう。前者にはなかった「宗教」という一章が後者においては加えられ、無限と有限との関係がより具体的に深く考察されているからである。さらに、そこで展開されている無限からの視点と有限からの視点という発想を携えて満之は「他力門哲学骸骨試稿」へと至る。

それ以後まとまったかたちでの哲学論文は書かれなかったけれど、晩年の『精神界』論文にせよ「有限無限録」にせよ、それらの土台を形成しているのは満之の哲学的思索、つまり強靱な論理であった。満之の思索の歩みをもう一度徹底的に辿り抜くことによって、彼がどこへ向かおうとしていたのかも明らかになってくるのではないだろうか。そして、それが思索者としての満之に対するわれわれの義務であり、満之から与えられる希望でもある。



“*The skeleton of a philosophy of religion*”